

二十五年ぶりの大きな感動

市野瀬 仁

(会員 佐伯市長島町)

私は淡窓伝光靈流佐伯詩道会の一員です。入会した経緯は学校から帰る途中、月一回程度特定の理髪店に寄ることが習慣になりました。それというのも、この主人の言動が、テキパキとして清潔で、生活ぶりが立派であることが分かったからです。

平成三年、九十三才で亡くなりましたが、七十七才まで現役でした。理髪師では県下で私が二番目でしょうと話されていました。

ある日

「先生詩吟をしませんか、健康にもいいですよ。」

「いや、私は音感が鈍いので無理ですよ。」

「そんなことは、たいした問題ではありませんよ、宗家のテープを聞かせましょうか。」

と言って、仕事中無造作に操作を始めたのです。私は別にどうということもなく聞き流しました。

それから半年程経って、白杵・津久見・佐伯の県南三市の回り順に詩吟大会が始まり、第一回は津久見であるというので見学に行ったのです。大会の終り頃名吟士と共に小学生・中学生・高校生らしき男女三人もいたようでした。この生徒達の透き通った高い美しい声の響き、素直な発声の中に自然に生れ出る流麗な流れと、その絶妙な変化の世界に、ひきこまれ鳥肌が出るほどの深い感動を覚えたのです。

詩吟とはこんなすばらしいものかと感極まったものでした。

のちほど知ったのですが、高校生の女の子は豊前詩道会から来たゲストで、入会して一年足らずしてコロンビア歌手の資格試験に入賞した光靈流詩道会とっておきの人であったということでした。

このことが縁となって、昭和四十五年七月三十日に佐伯詩道会に入会することとなったのです。それからというものは、何かに憑かれたように吟じたものです。それこそ、時と所かまわず吟じました。その結果、佐伯詩道会から「進歩賞」ともいふべき名で表彰され、トロフィーを頂きました。今も私の部屋の一角に立っていますが、

懐かしい感動の記念塔です。

平成六年十月三十日、佐伯詩道会発会三十周年記念大会が開催されました。これにより記念冊子の中から、郷土史を中心とした「構成吟」に私の思いと感じたことを述べたいと思います。

「美わしふるさと佐伯」(註)

明治の文壇国木田独歩はわづか一年足らずの短い期間でしたが、英語の教師として佐伯に滞在しました。彼は佐伯の自然をこよなく愛し、特に「城山」について「豊後の国佐伯の城山」と題する一文に「余が初めて佐伯に入るや、先ずこの山に心動き、余すでに佐伯を去るも眼底その景容を拭い去る能はず、この山なくば余には殆ど佐伯なきなり」と書いています。文化会館のすぐ上の「三の丸」には「城山」と題する近代詩が立っています。

佐伯の春 先ず 城山に来たり

夏 先ず 城山に来たり

秋また 早く 城山に来たり

冬は うど寒き 風の音を

先ず 城山の 林に聞くなり

城山 寂たる時 佐伯寂たり

城山 鳴る時 佐伯鳴る

佐伯は 城山の ものなればなり

この「城山」について今一つ

吉丸浮岳作の漢詩絶句一首

城山台上 草萌ゆるの初め

雁陣雲追うて 碧虚に没す

歳々年々 景相似たり

新愁澹淡 居諸を念う

雨の城山 ぬれては通う ホロロキギスが川こえて

番匠川原 ササこえて

もやの川瀬に 上荷の小唄 声はわきろか 赤たすき

灘のごりようさ ころいさ

寛政六年、八代佐伯藩主毛利高標は寛政の学者三大



名の一人と称される人物でしたが、久留米の人松下筑陰を佐伯に招いて藩校「四教堂」の師範としました。

広瀬淡窓は幼名を虎之助と云い、松下筑陰は十歳にして彼が学んだ旧師でありました。十四歳になった虎之助少年はこの旧師を慕って久住高原を通り、竹田を経て八日目に佐伯に着きました。佐伯で淡窓は松下筑陰宅の人となり「四教堂」の学生に交わって五ヶ月佐伯に滞在しました。淡窓は佐伯の印象、想い出を絶句で残しています。

羽明山下 水初めて 波あり

龍護寺前 棹を移して過ぐ

幾隊の 画船齋しく 月に浮かぶ

繁弦争つて奏す 竹枝の歌

また淡窓の高弟の一人中島子玉は、佐伯藩士中島幹衛門の長男として生まれました。淡窓は一年にしてその俊才ぶりを誉め「余、人を教えて以来、人材此人を以って第一とす」と語っています。又、淡窓を訪問した頼山陽は「自分は西遊して山水に耶馬溪を得、人材に中島子玉を得たり」と称した程でした。しかし、これ程の人材も

天命如何ともなし難く、天保五年破傷風にかかり次の辞世を残して世を去りました。

高情自ずから 世人と違う

我は是 南豊の 一布衣

三十六鱗 猶二を 缺ぐ

今朝天上 龍と化して 飛ぶ



入津坂の碑

さて、代々の佐伯藩主が広く学才を求めたことは松下筑陰の例でも明らかですが、明石秋室もその一人であります。彼は杵築藩士豊田八蔵の次男にうまれました。長

じて佐伯藩士 明石条左衛門の養子に迎えられることになりましたが、その時秋室曰く、「佐伯藩は小藩で意に満たぬが、所蔵の史書は天下に冠たるものと聞く、若し、自分を史書監督に当たらせ呉れるなら、此の話承知」と言ったそうです。文政三年書物奉行となり、その任実に十八年の長きに及びました。

最近、蒲江町が畑野浦峠の国道三八八号線沿いに建立した文学碑「入津坂の碑」が完成しました。明石秋室が藩公に代わって領内巡視の途中、入津坂を登り詰めて南北の気温の差に驚き、その風景を詠んだユニークな絶句一首が刻まれています。

入津に 下らんと欲して 雲坂長し

俄に驚く 氣候炎涼を 変ず

空に横う 一嶺は 南北を界し

北の麦は 青々として 南の麦は黄なり

ここで、佐伯市に隣接する弥生町に残る梅牟礼城趾にからむ佐伯氏滅亡の悲しい話に筆を進めましょう。

時は大永年間、室町幕府の衰退で各地の武將が互いに

領地を争い、威を競う戦国の世であります。当時、梅牟礼城主佐伯惟治は豊後の守護職大友氏の幕下にありました。しかし、何者かの讒言により逆意ありとされ、大友氏は白杵近江守長景に命じ二万余の大軍で城を囲みました。しかし、城は嶮阻にして難攻不落、守る城兵は勇戦奮闘して容易に落城しませんでした。しかし、水の手を押さえられ、孤立無援、衆寡を思い遂に惟治は敵將長景のすすめに応じ退城しました。わづかな人数で主従は日向路に向かう途中、日州三河町で新名一党に襲われ自害し、又、父の後を追った一子千代鶴も、途中の西野村で家臣と共にわずか九才で短い生を終えたのであります。大永七年十一月二十五日、ここに佐伯氏は滅亡しました。今は唯 梅牟礼城趾のみが空しく往時を偶ばせるのみであります。

衆寡支え難く 血涙吞む

当時の城壁 址猶存す

白雲嶺上 一輪の月

長く照らす英雄 千古の魂

明治・江戸期へとさかのぼって吟剣詩舞はだんだんと高まってきました。戦国期になると垂幕が静に上がって舞台や、右中央に「佐伯惟治公之霊」の文字が見えてきました。右下には梅牟礼城の模型が見える。

長身の坂井南桜山は白衣に身を装い、深網笠をかぶり、観衆を背にして佐伯惟治公之霊前にぬかづき、静に尺八を吹いている。やがて音は勢をまし身に迫ってきます。急に強く、弱く、遅く、早くと凄まじい響は奥深く広がっていきます。譏言ぎげんにより惟治公は城を後にして義憤の情堪えがたく堅田路へ去って行くのです。

遂にその音は尺八を突き破り、肉声の嗚咽が聞こえてくるのです。その時、梅牟礼城がバツタリ前に倒れて異様なシーンが展開しました。城・惟治・尺八・南桜山が渾然一体となって靈氣は会場を包みました。

時空を越えた演技は真に迫り、沈黙の時間が長く長く尾を引いたのです。

佐伯詩道会発会三十周年記念大会のためたい機会に、この劇的な構成詩舞によって深く大きな感動を覚えたのは私一人ではないと思います。芸術の真髄とはこんな世

界をいうのでしょうか。人は年を重ねると感動をするところが少なくなりません。思えば、昭和四十五年入会する機縁となったあの大きな感動から、小さな感動を何回か持ち続けてまいりましたが、二十五年間という私の吟歴の中で、今回の第二回目の体験は私の生命体の重要な一部となっていることを実感しました。また、今後も大きな感動の再来を期待して、詩吟道を歩むことを決意しています。

更に、こうした感動が、私の歴史研究の原動力を駆り立てる一助ともなっているように思います。

註「美わしふるさと佐伯」は

佐伯詩道会会長 (賛助会員) 岩崎 陽二 作